新納忠元（にいろただもと）生誕500年 1526－2026 伊佐市

新納忠元物語 七

伊佐市立菱刈郷土資料館　指導員　原田純一

曽木天堂ケ尾での忠元と秀吉との会見（前編）

豊臣秀吉は、九州統一目前となった島津氏征討の目的で、天正十五年（１５８７年）三月一日大坂を発ち、大軍勢を率いて四月二七日から丸一ケ月間も薩摩に滞在した。薩摩川内の泰平寺において、島津軍の太守島津義久と和議が成立した。しかし、宮之城・虎居城城主で義久・義弘の弟である歳久と大口城主の新納忠元は、この和議に反対し秀吉との徹底交戦を唱えていた。このため秀吉は、二人の恭順を確認するため京への帰途を、宮之城・大口を通って帰京することにした。

歳久は、病気だと称して、ついに秀吉との会見を行わなかった。このことが後に歳久の命取りとなる。

天正二十年（１５９２年）の朝鮮出兵の時、佐敷城下に舟待ちと称して留まっていた湯之尾城主梅北宮内左衛門尉国兼が、佐敷城を乗っ取る事件、通称『梅北国兼の乱』が発生した。この乱に歳久の家来が多く含まれていたことと、天正十五年に病気だと称して秀吉との会見を行わなかった理由で、秀吉が義久に弟歳久の首を差し出すように命令し、義久は命令に逆らえず、歳久を討ち取り、首を肥前名護屋城の秀吉のもとに届けた。首実検をされ、更に、京都の一条戻橋にさらされた。

一方、太守義久の弟義弘は、義久が和睦したことを知り、鶴田にいた秀吉と会見し和睦した。

忠元は、秀吉軍の先鋒が鶴田を発ったことを知ると、奇抜な策を実行した。細川幽斉宛に、米一俵と書状を送ったのである。「京勢は食い物に乏しくお困りの由と承る。これを食して我が大口に押し寄せられよ。忠元存分に会釈仕る。」これは、和歌の師と仰ぐ細川幽斉に対する忠元の敬意であるとともに、秀吉に対する交戦宣言であった。

その後も、秀吉は忠元の籠る大口城に、再三使者を送り込んだが、「勝敗は戦いの常、もとより論ずるところではない、一戦も交えることなく軍門に下ることは、薩摩に人なきが如である。断じて忍び難い。」との心意気と、「秀吉軍は、すでに食糧や飲み水に乏しく、病人も続出している。まして地の利は吾らにある。しかも、初夏の長旅で兵士達は疲労困ぱいして、京に帰ることだけを考えている軍勢と、このまま戦わなければ死なねばならぬと考える軍勢とが戦えば、どちらが勝つか明らかであろう…」と、使者を追い返し続けた。

秀吉は更に軍を進め、五月二四日、大口曽木天堂ケ尾（関白陣）に陣を置き、大口城主新納忠元との会見を楽しみに待った。

主君義久・義弘は、このような言動を続ける忠元のもとに、忠元の大叔父新納忠澄の孫忠饒に、書状を持たせた。『君命である、速やかに下城し秀吉公に降伏して会見せよ、義久・義弘二人共秀吉公と和睦し、義久の三女亀寿、義弘の嫡子又一郎をすでに人質として差し出した、秀吉殿に逆らうことは、主君に弓を引く逆賊である。』と書かれていた。忠元は、主君の命令には背けず、断腸の思いで天堂ケ尾の秀吉と会見することにした。

☆次回は『曽木天堂ケ尾での忠元と秀吉との会見（後編）』

（参考資料）
・旧記雑録拾遺　忠元勲功記
・大口市郷土誌　上巻267～277ページ